

昭和30年代の五日市における大規模ラン生産の回顧

上田 衛*、石田 源次郎

広島市植物公園は、平成18年11月3日に開園30周年となる記念すべき日を迎えた。植物公園は、開園当初から今日まで一貫してラン科植物の収集・保全・研究を行っているが、園に近い佐伯区五日市地区は昭和30年代後半、日本で最も早く農事組合組織によるランの大規模生産販売に取り組んだ地域である。ただ、五日市地区で行われた大規模ラン生産に関する記録がほとんど残されていないため、一般にはあまり知られていない。

日本で初めてと思われるラン大規模生産発祥の地に隣接する地域に植物公園が設置され、園は現在も引き続きランを主体に活動していること、そして園のラン栽培及び展示活動は、五日市地区での大規模ラン生産と少なからずかかわりがあること、また広島地域におけるランに関する情報を収集し記録にとどめることも園の役割、活動の一環であるという観点から、この五日市地区での大規模ラン栽培に関する記録や文献を探していたところ、植物公園のラン栽培の手助けをしていただいた上田衛氏が当時の事業に関与されていたということが判明した。そこで上田衛氏にお願いし、その当時のことを回顧し、以下の通り記録にとどめていただいた。

五日市とラン

広島県広島市佐伯区五日市地区（旧佐伯郡五日市町）は、戦前から県内有数の花卉園芸栽培地で、球根類の促成栽培や花木栽培が行われていた。その山田地区では山田尊氏が観葉植物を生産栽培され、平地では高木作一氏がカーネーションを育種して、3品種（「春の粧」「秀峰」「明星」）を登録され、また広島県花卉園芸農業協同組合長（当時）谷口正氏がチューリップ、ユリ、水仙等の球根類を年末年始出



写真1. ハウス全景（昭和37年撮影）

荷用に温度処理による促成栽培を行っておられた。

昭和30(1955)年頃、山田尊氏が農業研修生の一人としてアメリカ研修に行かれた時に米国からゴムノキ「デコラ」とデンドロビウム・ファレノプシス系「レディーハミルトン」を持ち帰り、それらの栽培を始められていた。またその頃、台湾から引き上げ帰国されていた山口県田布施町在住の米沢耕一氏が月2～3回、山田氏の温室へデン・ファレ「レディーハミルトン」の生育観察と栽培指導を兼ねて来られていた。米沢氏は、その帰路カーネーション栽培家の高木氏を訪れ、園芸界の事情や状況等を話されていた。その後、高木氏は廿日市市平良（旧佐伯郡廿日市町平良）へ移転し、300坪の温室を建設して、フリージアの品種改良等を始められた。しかし、この当時園芸界全体が厳しさを増し、カーネーションやチューリップ、キク、ユリ等の切花全体が安値となったため、高木氏は経営の行き詰りを感じて、商品価値のある他の園芸作物を模索しておられた。高木氏は米沢耕一氏と知り合った関係で米沢氏宅のラン栽培状況を見学、ラン栽培とその美しさに魅力を感じてランの虜となり、次第に熱が入っていった。昭和31年に高木氏の長男誠作氏が東京農業大学に入学、次男浩次郎氏が学校卒業後農業研修生として渡米し、ロッドマクレランオーキッドで研修を始められていたことから、高木氏はシンビジウムの親株等を入手し、ますますラン栽培に熱が入って行った。

その頃、山口県田布施町の米沢氏が廿日市の高木農園で播種したデンドロビウムの苗が生長し始め、廿日市、五日市の農家と高木農園を含め11名で協業組織の結成が検討され、花卉園芸開拓を志し、全員でデンドロビウム栽培に取り組むべく、新しい一歩を踏み出すこととなった。

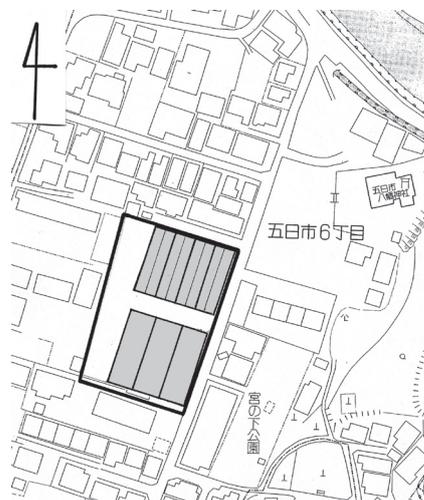


図. 「広島蘭業組合」ハウス設置位置図
(網かけ部分ハウス：ドーム型3棟、両屋根型4棟)

*広島市佐伯区五日市六丁目、広島市洋蘭倶楽部理事

デンドロビウムの栽培開始

昭和30年代にデンドロビウムの種子を播種し、苗が大きく育ち、各人に分配された。個々に持帰った苗は、米沢氏と高木氏の指導のもと、3寸鉢～4寸鉢で生育させた。

昭和36年に組合員協議の上、農業近代化資金を申請、借入して「広島蘭業組合」を設立した。翌37年、広島市佐伯区五日市六丁目4の敷地面積約1,180坪の土地に硬質アクリル波板屋根のドーム型施設3棟とハウス4棟（合計面積832坪）を建て、コンクリート製ベッドの半水耕栽培方式で栽培管理を始めた（図）。

灌水は、鉢内の乾燥状態を観察して、夏は3～4日に1回、冬は出荷の関係で乾燥気味に管理した。約10万鉢を大量生産し、梅雨あけ頃より廿日市市吉和（旧佐伯郡吉和村中道、標高700m）で数品種の山上げ栽培を行った。そこで13～14℃以下の温度に30日間程度あわせた後、山おろしをし、10月から大型ハウス内で管理した。

夏季に山上げ栽培するに至った経緯は明らかではないが、昭和31年12月号（第11巻12号）の『農耕と園芸』に「洋ラン・デンドロビウムの開花におよぼす温度処理と電燈照明の影響」という研究記事を藤原政次氏（現広島洋蘭倶楽部顧問）が掲載されていること、また藤原氏は廿日市原に在住されていて、高木農園にたびたび訪問されていたことなどから、藤原氏のデンドロビウム栽培に関する研究が大いに参考となって、山上げ栽培を実施したものと考えられる。

山上げ処理した株は、12月10日前後から開花が始まり、昭和37年12月から約3ヶ月間にわたり、およそ1万鉢を全国各地へ向け出荷した。

一方、翌年3～4月頃から空となった栽培用ベッドには、各人から開花見込み株を搬入、管理し、次年の開花に向けて栽培を始めた。デンドロビウムの他にカトレヤ、バンダの寄せ植え苗、フラスコ苗も



写真2. ハウス間通路からの景観 (昭和37年撮影)

米国から輸入して、育苗も同時に取組んで行った。

米沢氏がセッコク系デンドロビウムに力を入れた動機は、五日市の蘭業組合の人々と共に「東京オリンピックを機会に平和宣言都市広島に百万の花を咲かせて世界の人々を迎えよう」との計画を実行するため、各人が持ち寄った株をハウスに入室させる準備をしているさなかの10月末に大霜が降り、その多くのデンドロビウムが凍傷の被害を被った。ほとんどのデンドロビウムが障害を受けたが、そのような中であって凍害を免れたデンドロビウムがあり、我々に強い印象を与えた。これがセッコク系デンドロビウムの品種であった。セッコクの血が入った品種には、当時 Snowflake、King Lake、Happy Red ほか数品種あり、これらの品種は、花芽分化時期が早く、しかも年内から翌年1月に花が咲き、葉にも異常がないので、充分営利品種になるものと思われた。これらセッコク系品種は、山上げする必要もなく、五日市での栽培だけでも十分花芽を分化した。ただデンドロビウムは、播種後の育苗が遅いので、3年経過すると播種育苗時の株に比べ5～6倍の面積と労力が必要となり、栽培管理も難しくなる。光線と通風が第一である。大型ハウスでの管理は楽なように思われたが、思わぬところに見落としがあるので、通風が悪いため、病害虫が発生したり、光線が不足したり等、環境条件を整える事が必要であることがわかった。

特に各人の温室における栽培管理条件が異なっていたため、大型ハウスへ搬入した後、そこでの管理で生育差（軟弱株、縦長株）、また交配種のため株の充実面でも不揃いが生じた。植え方、植え替え時期等において個人差が生じることや各品種（約50種）の特徴も知りつくさなければならないことは、趣味家でも同じことであった。

総じてデンドロビウムの栽培は、順調で、良く生長し、開花時期になると多くの見学者が来られ、ほめられたり、驚いたりして帰られた事も多くあった。



写真3. ハウス内のデンドロビウム栽培状況 (昭和37年撮影)

「百姓がラン栽培をしている」などと言って我々を批判した趣味家もいたが、見事に開花、販売まで至ったことは、それまでに培ってきた球根類の促成栽培農家の経験が貢献していると思われた。

コミュニティーポットから3寸鉢に生長させる育苗期間中に生育不良の株や病虫害被害株等をその都度淘汰することが必要で、経費と労力の削減に努め、良品のみの生産に努めた。これは高木作一氏が言われた「育種とはいかに上手に早く捨てるか」だという言葉が、このデンドロビウム栽培現場でも大いに実践的なものであることを痛感させられた。カーネーションでは、播種時200～300本の芽が出て生長させる株は20本程度、2年栽培して最終的には1～2本残すことになり、試作しだして3年かかるのが育種の常識である。

栽培管理

ハウスの日常管理は、7棟をラン栽培の経験がない6人（女性5人と男性1人）で行った。1棟につき3～10品種を配置し、その栽培管理を女性1人が受け持ったが、1棟のハウスに性質が異なる複数の品種が入っているため、管理には十分に配慮したものの、困難な面に直面することが多かった。就業前にその日の作業の打ち合わせを行うようにしていたが、管理上の問題や気がかりなことが発生したときには、皆で検討するなり、米沢氏や高木氏、杉山組合長に報告し、回答を得て対応した。

灌水は1棟ずつ順に行い、7棟を一巡するのに1週間かかった。ハウス近くの井戸水は、その場所が昔、海であったらしく、井戸水に塩分が含まれるため、少し離れたところから給水することで対応した。5～10月の間はハウスのサイドを開放し、山上げ期間中は株間を広げ通風と採光に努め、強健な株に育てるよう全員で管理を行った。1年目には気付かないことでも、翌年からは気が付くのも早く、たとえば小さな雑草でも鉢内にあるのを見つけるとすぐに除草するようになったり、また鉢にも青ゴケがつかないように1鉢ずつ気をつけるなど、一人一人が真剣に栽培管理に取り組んだ。支柱立ても記録を見て皆で協力し、立て方などを検討し、手早く行っていった。

花の命は短くて

播種から育苗、開花までの長い時間と多額の資金並びに莫大な労力、愛情を込めて育てても、人の嗜好に合わないと受け入れてもらえず、これほどはかないものはないと思った。昭和37年から大温室で栽培し始め、4年間で約30,000鉢を出荷し、当初は1株1,000円で販売できたものの、早くも3年後には1鉢500円程度まで価格が下落し、輸送賃にもならず、採算も取れない状況となったため、残念なことに花を見ながら組合を解散せざるをえなくなった。足かけ10年程、夢を見続け、追いかけたが、その経営または技術のどちらかが間違っていたことを認識しなくてはならない。大量生産、交配改良の欠点、知識不足、経験不足など、あらゆることが災いとなることを勉強させられ、そんな中で以下のことを学んだ。

・ラン栽培での半水耕栽培：春から秋まで鉢底から給水させる半水耕栽培を行い、秋からは乾かし気味に管理し、鉢内を十分乾かしたと考えていたが、出荷した鉢の芯部分が十分に乾いていなかった。出荷時期が冬期のため乾燥させた株と思っても輸送期間中に鉢内が凍結し売店で枯死したと思われる（当時の輸送機関は国鉄の貨物便で東北地方へは2日余りかかった）。

・ラン栽培での育苗では、早く見極めて上手に捨てること（あせりと品種選定に誤りがあった）。

資金

施設資金と運転資金であるが、半分は各組合員が自己負担した。くわえて、その後の管理費と出荷費などの運転資金、施設資金が初期資金にプラスされることになり、二重負担となった。農業近代化資金の借入金で一時的には個人負担が軽減されたけれども、借入金は返済しなければならないから、組合員には大変な出資であった。

昭和30年代池田勇人首相が「貧乏人は麦飯を食え」と言われたが、「貧乏人はランを作るな」と昔聞いたことがある。施設園芸、特にラン栽培には多額の資金の投資が必要であった。

運転資金については、何度か話し合いをして失敗のないよう十分注意していたが、最終的には経験不足と長年に及ぶ栽培の経費の積み重ねが大きく、採算が取れなくなったことにより、組合組織を解散せざるを得なくなった。

最後に

蘭業組合の運営、経営では、デンドロビウムの山上げ栽培、開花促成、販売のノウハウなど色々なことを学び、開拓したことが多い。それまで経験しなかったことを、このデンドロビウムの生産組合での生産栽培、販売を通しての経験は、その後の人生に大いに役立つこととなり、大変有難いと感謝している。

最後になったが、米沢耕一氏からはランの栽培、育種、育苗などを、また高木作一氏からはカーネーションについて多くを学び教えていただき、多大なお世話になったことに深く感謝を申し上げたい。

なお、本稿の執筆に当たり、広島蘭業組合員であった油免勇氏、谷口農園谷口迪生氏そして広島洋蘭倶楽部顧問藤原政次氏には多大なるご助言、資料提供をいただきました。ここに厚く感謝申し上げます。

— 当時に栽培していた主な品種（番号は、米沢氏の交配番号） —

- D. Gold Swan No2
No1 との逆でやや色は薄いですが花つきはきわめて良く、花持ちも良い。
- D. Hojun (Snowflake x Merry Christmas)
花持ちよく芳香有り。早咲き。
- D. King Lake 'Gion'
キングレーク中、群を抜くすばらしい個体。花持ち、花つきは非常に良い。営利品種。
- D. Snowflake (nobile x Cassiope 'Miss. Biwako')
ピンク系が多く矮性の早咲き種。
- D. Spring Hill (Indoyo Black x (Iris x Gatton Beau))
番号不明だが花全体が桜色。厚弁整形大輪、花つき良いが4月咲の晩生種。
- D. White king ((Iris x Gatton Beau) x Mont Blanc)
純白種花。L喉に小さな淡朱褐色。肉厚整形大輪。現在も栽培されている営利用種。
- No66 : King Lake (Cassiope Biwako x Lady Colman)
濃紫紅色花。Lは白色に濃紫紅色の目玉入り。セッコク系で早咲き耐寒性がある。
- No69 : Gold Swan No1 (White Swan x Thwaitesiae)
花は肉厚の橙黄色。Lは黄紫黒色でビロード状。花持ち、花つき特に良い。
- No70 : Snow Morning (Euryalus I.T. x Himeji)
花は雪白色芳香あり。中には淡ピンク花もある。花つき、株立ち良好。強健種。
- No84 : Happy Red ((nobile dark x Gatton Monarch) x nobile shilin)
鉢仕立てに良い品種。花は濃紫紅色で花弁に光沢があり、Lは濃紫赤目、株立ちのよい強健種。
- No91 : Meruma Tabuse (Merlin Shinjiku x Vicount T. Sohma)
花は濃紫紅色。Lに紫褐色の目がはいり、極厚肉弁な極大輪の花(10位)、受け咲き。
- No94 : Golden Dream ゴールデンドリーム (Glace Ohmi x Thwaitesiae)
花色は橙黄色。Lは濃紫褐色。黄花としては花つき良い実用強健種。
- No97 : Western Queen (M.Q x Thwaitesiae veitch)
鮮桃色花。L紫紅色に黄色のフチどり目が入る美しい巨大輪。花つきもよい。
- No102 : Merry Christmas (nobile x Akathu-sekkoku)
淡ピンクから濃紫紅色花。Lは濃紫褐色の目入り、中輪多花性。強健、耐寒性あり。11～12月の早咲き種。
- No107 : (Thwaitesiae x Glace Ohmi)
ゴールドンドリームの逆交配。花は白に紫黒の目。花径14の巨大輪だが1茎2～3輪。花は淡黄よりやや濃くなり、ピンクの花を咲かせたりして、同一色彩花はなかった。花持ちは良好。
- No112 : Happy Giants (nobile shilin x (nobile dark x Gatton Morarch))
ハッピーレッドの逆交配で優れた営利種で巨大輪花。
- No123 : Zuiho x Mont Blanc
純白大輪花。Lに少し黄目が入り、香りもある。
- No138 : Zuiho x Euryalus I.T.
白色大輪花。肉厚で花つき良く切花用種。
- No240 : Zuiho x Sagimusume
純白大輪切花用。交配親両は白色花。その他、セッコクとの交配で無加温でも開花する品種(No73)、花つきが良いが小輪(No99)、株立ちは良く強健ではあるが株数にしては花つきの悪いもの(No120)等、親としたら良い品種や栽培の難しい種類等多種多彩であった。

参考資料

1. 杉山光夫、1964. 832坪の温室共同出資でデンドロビウムの大量生産広島蘭業組合。別冊農耕と園芸「洋ランと観葉植物」p16 - 17. 誠文堂新光社。
2. 藤原政次、1956. 洋ラン・デンドロビウムの開花におよぼす温度処理と電燈照明の影響。農耕と園芸: Vol.11No.12: p 90. 誠文堂新光社。
3. 米沢耕一、1976. 石斛系 Dendrobium について。日本蘭協会誌: Vol.22No.1: p12 - 15.